池袋学の展開

高萩　宏

池袋学と銘打って始めた地域研究プログラムも二年目を迎えた。二〇一五年は、東京芸術劇場にとっては二十五周年記念の年、そして第二次世界大戦から七十年の年だった。そこで、戦後七十年企画として「池袋＝自由文化都市プロジェクト」として、戦後の池袋に広がった闇市に焦点をあてて、芸術劇場の展示室と西口公園を使った展示・イベントを行うこととなった。（この事業の展示には、文化庁からの地域イニシアティブの補助金もつき、イベントにはホッピービバレッジ株式会社等の特別協賛も受けることができた。）

今の池袋は、やはり闇市に「光」をあてないと分からない、しかも「闇市＝怖い」という単純な光でなく、そこからどういう可能性が生まれ、何が残っているのかを考えるべく、闇市という活気ある市場に集ってきた人々の存在を前向きにとらえてみようという試みだった。しかし、どうしても資料が少ない、写真、映像も思ったほどには残っていなかった。記憶の中にある池袋の闇市について、継続的に資料化していくべき、研究していくべきと、改めて思った。

そして、二〇一五年は、昔を振り返るだけでなく池袋にとって画期的なことが数多く起こった。まず、五月には豊島区の新庁舎への引っ越しが行われ、旧庁舎跡には八つのホールを含んだ新たな施設を作る計画も発表された。七月には国の都市緊急整備地域に池袋がようやく選ばれたことで、池袋の開発は西も東も加速度を増すことになってきている。豊島国際アーツ＆カルチャー懇話会が、前文化庁長官の近藤誠一さんを会長に発足し、具体的な実施案を作成中である。

そんな中、今年の池袋学での芸術劇場の担当回では、池袋モンパルナスについて、セゾン文化について、漫画ブームの原点としてのトキワ荘について、さらなるお話を聞いた。

二〇一六年の三月には「池袋モンパルナス」と題された演劇公演が地元の劇団「銅鑼」で上演されるなど（残念ながら、今回は六本木の俳優座劇場での上演であったが、将来、東京芸術劇場で再演を企画中である）池袋の原点を様々に問い直そうという機運はましている。また、美術大学受験のために池袋と目白の間にあるすいどーばた美術学院に通ってきた美学生の卵たちにも焦点を当てられないかと考えている。セゾン文化は、今年度はセゾン美術館の初期の画期的な動きに焦点を当てたが、スタジオ２００が切り開いた舞台芸術分野における新たな文化現象にもさらに興味が広がった。大正期の池袋にも焦点を当てていきたいという動きもある。過去の池袋について調べながら、やはり池袋の未来についても考えて行こうという機運が生まれている。

「池袋学」これからが楽しみだ。

（たかはぎひろし　東京芸術劇場副館長）